

発達期の子どもが通う保育園・発達支援事業所・ 特別支援学校での食べる機能の発達調査

Evaluation and Guidance Considering the Development of Eating Skills for Infants with Disabilities

中嶋 理香 NAKAJIMA Rika
(人間発達学部)

I. 研究開始当初の背景

食べる行動の発達に影響を与える要因は多様である。近年、医療者による食べる機能の発達支援は、この多様な要因が共通認識となり、充実してきた。しかし、保育教育現場で食べる機能の理解は、咀嚼といった摂食嚥下機能にとどまり、姿勢や手の操作性、認知能力、社会性の発達を含めた包括な理解が不足していた。食べる行為に対して、包括的理解に向けて医療と保育教育現場の連携が必要であり、医療者からの積極的な働きが求められていた。

II. 研究の目的

食べる機能の発達支援に対する医療者と保育者や教職員との連携に向けて、効率よく共通認識を構築するには、評価票の作成が急務である。その内容を選定するために(1)(2)を明らかにすることを目的とした。

- (1) 保育教育現場の食支援の実態を把握すること (保育教育現場の実態調査)
- (2) 児童発達支援事業所に通う児に対する保育者が行う食べる機能の発達評価

本調査研究は、平成28年度科学研究費助成事業(基盤研究(C))(一般)課題番号16K04850「障がいをもつ乳幼児の食べ方と発達を理解した指導・評価プログラム開発」である。名古屋芸術大学研究倫理審査委員会にて承認(名芸大東第289号)を得て実施した。

III. 保育教育現場の食支援の実態調査

(目的) 保育教育現場と医療者との連携が課題であるとの報告が多い中、食支援の実態については明らかでない。給食等で実施している支援を環境設定と保育者や教職員の意識から調査する。

(対象) 2016年にX県下の特別支援学校、児童発達支援事業所、公立保育園に勤務する保育者及び教職員である。

(調査の手続き) 任意回答、郵送回答、無記名とした。返送を持って同意と判断した。

(調査時期) 2016年9月～11月

(調査票の概要) (付録1) 設問は、基礎情報、食指導の実情、回答者の実情の3領域に分けて作成し、合計47問である。基礎情報は、回答者の情報と勤務施設の情報に分けた。食指導の実情の設問は、食指導の方針、食指導環境、職員等に対する教育環境で構成した。回答者の実情領域は、回答者自身の困り感と自由記述の設問で構成した。

(調査資料) 回収率33%、有効回答は422通であった。

(結果と考察)

(a) 基礎情報(回答者)(付録2): 回答者は、保育者が74%、次いで教諭12%、その他の職種12%であった。回答者の業務は、管理職57%、主任26%であった。摂食嚥下機能の指導経験のない回答者が67%であった。指導経験をもつ回答者は、全体の32%で、その中10年以上の経験者は17%であった。摂食嚥下機能をほぼ理解していると考えている回答者の割合は28%であった。

本研究の回答者は、管理職が多く、保育者・教職員の職務に10年以上の経験をもつ熟練者であった。しかし、摂食嚥下機能の指導経験は、未経験である割合が67%、摂食嚥下機能に関する知識を持っている回答者の割合は28%であった。

(b) 基礎情報(施設)(付録3): 特別支援学校からは、1学校につき2通の回答を得たことから重複を避けるために管理職の回答のみを施設の基礎情報の分析には用いた。したがって回答数は、386である。保育所・子ども園が全体の81%を占めていた。給食は、92%の施設で提供していた。

障害を持つ幼児・児童生徒(以下子ども)の割合を見ると、障害児が全くいないとする施設は、全体の22%であった。障害を持つ子どもが1～5人未満とする回答が37%であった。在籍する障害児は、摂食嚥下機能に障害がなく、特別な配慮は必要ないとの回答が73%であった。一方で15%の施設では、在籍している総障害児の25%位に摂食嚥下機能の障害に対する特別な配慮が必要であった。その他には、「偏食やほぼ丸のみを含めれば70～80%」とする記述や具体的な人数の記載があった。

以上の結果、すなわち在籍する子どものうち、摂食嚥下機能の発達に課題を持っている、または、特別な配慮が必要な子どもの割合が相対的に低いという結果は予想に反していた。定型発達児にとってもよく噛まない、早食い、丸呑み、遊び食べ、好き嫌い等は、長年育児上の課題であり、加えて医療者からの報告では、ダウン症、脳性麻痺、発達障害に対しても同じ問題が挙げられている。定型発達児と障害児の食べる機能の発達の課題が共通しているという認識がない可能性がある。言い換えると障害児の食べる機能の問題は障害であり、定型発達児の問題は、育児上の悩みとして、両者に共有する問題であっても全く異なるものとして一般に解釈される可能性が考えられた。

(c) 食事指導の実情

給食等の時間の過ごし方(付録4): 回答者は、子どもと一緒に自らの食事も摂り

(63%)、1年間同じ子どもを介助する割合は44%であった。介助の必要な場合は、子どもの障害の状態に応じて教職員を配置(22%)していた。

食事場面での教育的配慮(付録5)：食事は必要栄養量を摂取するだけでなく、コミュニケーション場面でもある。保育者や教職員は、1日のスケジュール内で給食時間内に食事を済ませることが求められる。こうした状況で回答者は、会話が弾むように質問や共感(43%)し、子どものペースにあった速度(47%)で食べることを心がけていた。複数回答やその他の回答も多く、多様であったことは、子どもに応じた配慮やその場の状況を加味していることがうかがえた。食べる量は、あらかじめ子どもの食べる量を調節する(27%)、子どもの希望に応じて調整する(17%)と、何らかの調整を行っていた。これに対して規程の食事量を完全に摂取する指導である「残さず食べるように」は、11%であった。したがって、子どもの年齢に応じた必要栄養量の摂取よりは、個人の可能摂取量に重きを置いた指導を行っていた。この点については、栄養摂取という観点から問題があるという指摘もあり、今後の指導の在り方の課題であると思われた。

食指導場面の環境設定(付録6)

子どもの食事を配膳後に手で食べやすいように加工する手元加工を実施している施設は58%(225施設)で、現在手元加工の必要な児はいないが、手元加工することが可能な6施設との回答を合わせると231施設(約60%)であった。食品のテクスチャーを変えるために用いる増粘剤等を使用する子どもがいない割合は65%、使用する割合は6%であった。増粘剤等の使用が認められていない割合は23%であった。食品の持ち込みが可能な割合は52%であった。

食形態、食具、椅子・机、コップなど食事場面で使用する物の選定方法を複数回答で尋ねた。この設問での単一回答と複数回答の結果を比較して、指導場面での柔軟性について検討した。単一回答を選択肢がなく柔軟性がない、複数回答を選択肢があり柔軟性があると判断した。結果、単一回答の割合が最も高いのは椅子・机で、共通の物を使用する割合が62%、次いで食具50%、食形態38%であった。コップ等の水分摂取時に使用する物は31%であった。柔軟な対応が取れるのは、コップ等の水分摂取時に使用するもので、持ち運びやすさや個別性の高さが反映している可能性が考えられた。

また、選定方法は、職員間で相談して決める割合がすべての品目で多かったが、専門家の意見等を参考にする割合は低かった。家族が選択する、個人所有のものを持ち込めるとする回答も多かった。

外部専門家の利用・指導：外部専門家(医師・歯科医・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士)による直接的指導の割合は10%に満たなかった。外部専門家からの助言を受けている割合10%~15%であった。

食事指導の環境設定は、食べる機能の発達に影響する重要である。教職員は、自らも食事をとりながら、手で食形態や量を調整して、介助していた。手元加工には、子どもの

摂食嚥下機能、食具の操作、食べやすさ、体調を判断する必要がある、回答者はこうした責任を担っていると考えられた。

机や椅子の高さは、児の体形に合わせると食具を使用しやすくなることは医療者にとっては、重要な位置づけとなっている。専門家の意見を参考にすることが少ないことから、体型や障害種の異なる子どもを同じ机・椅子を使用することに対する弊害を医療者は伝えていく必要がある。

(d) 教育環境（付録7）

教育環境は、研修実績・研修予定、情報収集の方法の設問、公費で研修に参加できるかの回答から検討した。回答者は、過去2年間において摂食嚥下機能の研修を受講した割合は14%、また研修が予定されているのは8%であった。しかし、公費で研修に参加できるとの回答は62%、また、摂食嚥下機能の知識を経験者にたずねるやインターネット等を使う等、自分から積極的に収集するとの回答をあわせて91%であった。

(e) 回答者の実情（付録8）

食の問題に関すること

回答者の食べる機能の発達支援に関する意識を①困り感（について3つの設問保護者からの食に関する相談、直接指導する際の困り感、誤嚥の心配の有無）と②教職員間で子どもの摂食嚥下機能や食事場面の過ごし方が話題になるかの設問と、最近の子どもの食べる様子で気にかかることについて3つを上限に自由記述から検討した。

保護者から相談を受けている割合は、89%であった。子どもの食に対して実際に困っていると感じている割合は45%であり、困り感がない割合は53%であった。一方誤嚥については、心配している割合は65%であった。また、教職員間で子どもの食に関することが話題によく上ると感じている回答者（47%）と感じていない回答者（45%）は、ほぼ同数であった。

日々の実践において食の問題は、保護者からの相談を受けた場合、自らが困っている場合、誤嚥するのではないかと感じた場合が契機となって保育者や教職員に意識化されると思われる。これは、言い換えると何らかの契機がなければ、子どもの食行動は意識化されないといえる。日々の実践で保護者からの相談を受ける機会が多いことからその内容を医療者も知っておく必要があると思われる。さらに、今回の結果で困っている割合よりも誤嚥を心配した経験がある割合が高いことから、保育者や教職員が安心して食指導しているとは言えない状況にあると考えられた。

食に関して気にかかること：子どもの食べる様子で3つを上限に気にかかることを記述してもらった。気にかかることの回答の総数は、840である。記述内容を以下の13のカテゴリーに分けた。

- ① 摂食嚥下機能・食べ方・咀嚼：よくかまない、なかなか飲み込まない、早食い、丸呑み、詰め込みすぎ

- ② 姿勢：肘を付く、姿勢がわるい
- ③ 強い嗜好性：偏食、好き嫌が多い、味の濃い物を好む
- ④ マナー：一品食べ、食事マナー、口に食べ物があるままで話す
- ⑤ 食具：茶碗を持たない、箸が使えない、持ち方がおかしい
- ⑥ 食への関心：集中しない、食欲がない
- ⑦ 食時間への意識：食べるのが遅い、ぼーっとしている
- ⑧ 食形態：硬い物を嫌がる、発達に合った食形態か、保護者が子どもにあった食形態を理解していない等
- ⑨ 食事量：食べる量にムラがある、少量でも平気
- ⑩ 誤嚥
- ⑪ アレルギー
- ⑫ 食経験：朝食が単品、食わず嫌い
- ⑬ その他

口腔機能全般・食べ方・咀嚼に関して気になるとする回答が全体の35%を占め、次いで偏食を含む強い食嗜好性16%、姿勢15%であった。

回答者の気にかかることは、多岐にわたっていたが一般家庭から寄せられる内容を同じだと思われる。したがって、口腔機能等、姿勢、偏食を含む強い食嗜好性は、障害の有無や年齢を超えたユニバーサルな問題と捉える必要がある。幼児期や学童期の学習には、環境設定が重要である。食育活動では、地産地消や体験活動等が成果を上げている。こうした取り組みに加えて、毎日の食環境を食べる機能の発達という観点から見直す必要があると思われる。

【実態調査研究の成果】

(a) 摂食嚥下機能の発達に課題がある、または、特別な配慮が必要な子どもの割合は相対的に低いが、子どもの食べる様子で気になる事を問うと、摂食嚥下機能、姿勢、強い食嗜好性が挙げられた。また、一般的に育児中の保護者からは、よく噛まない、偏食、遊び食べが悩みとして長年にわたって挙げられている。家庭と保育教育上の気にかかることが同じであることが分かる。保育教育上の具体的な課題として保育者や教職員が捉えていく必要がある。保育者や教職員に対して食べる機能の発達に関する知識を学習する機会を増やし、食べる機能の発達という視点から主体的に食環境をとらえ直す必要性があることが示唆された。

(b) 保育者や教職者は、自らの判断で手元調理を行うことや予め食べる量を調整していることが明らかになった。食形態や必要栄養量の判断を保育者や教職員個人が担うことは危機管理の点で課題があると思われた。

(c) 子どもの食べやすさは、手元調理で対応し、子どもの使用する備品は、水分摂取に

用いるコップ等の持参によって対応していた。しかし、椅子・机は共通備品の使用率が高く、子どもの体型や障害に応じた対応は十分でない可能性が考えられた。したがって、食べる行為には、摂食嚥下機能のみならず体型にあった環境設定が必要であることの認識が薄い可能性があった。

以上のことから食べる機能に対する医療者が持っている知識を積極的に発信する必要性が示唆された。

Ⅳ. 児童発達支援事業所の児に対する保育者による食べる機能の発達評価

（目的）児童発達支援事業所に勤務する保育者が実際に担当する児を評価して、保育者が抱く児に対する課題意識から医療者との連携する糸口をつかむことである。

（資料収集の方法と対象数）（付録9）X県下にある26（2017年度時点）の保育所等訪問支援事業または児童発達支援事業施設のうち、協力の得られた10施設（以下施設）に在籍する児の中、養育者の同意が得られた計141児に対して保育者が質問紙に回答した。このうち未記入項目のあった9人分の資料を除く132人の質問紙を資料とした。対象児1人に対して質問紙1枚の提出を求めた。回答する際に担当保育者による単独回答または、複数の保育者での協議回答とした。

（資料収集の期間）2017年10月～2017年11月

資料の内容：質問は、食形態、姿勢、食具の使用／持ち方、食べ方（早食い・詰め込み・丸呑み等）、偏食、食マナー（立ち歩く、一品食べ、いただきます等の挨拶。舐り箸など）の6領域について多肢選択肢、単一回答で訊ねた。食べる機能の発達評価は、領域別に①順調、②保育活動として十分対応できており、専門職の介入を必要としない、③保育者の声掛けや介助する頻度が少ない、④声掛けや介助する頻度が多い、⑤医療・療育・家庭の連携がすでに取れており現在共通の認識で取り組んでいる、⑥児への指導に苦慮している、以上6段階に分けた。

資料の分析：評価領域間と評価領域内の比較を行った。加えて、環境要因として医療職が指導を実施する機能訓練実施施設と非実施施設の資料を比較した。また、業者委託給食を提供する施設と自園調理もしくは弁当持参する非業者委託給食施設を比較した。

（結果と考察）

付録10に全回答、機能訓練実施施設と非実施施設の回答、昼食形態別の割合と回答人数を示す。児童発達支援施設の保育者は、対象児の約30%に対して順調な食べる機能の発達だと判断した。一方で指導を必要と感じているのは特にマナー領域で、食べることに集中しないことや気になることがあるという回答であった。対象児の30%は順調であるが、残り約70%の対象児に何らかの支援が必要だと捉えていた。この割合は、一般保育園での調査と比較して高い。

評価領域間比較：食具領域の順調であるとの回答数は、姿勢領域（ $p=0.0162$ ）との差は

ないが、他の領域に比べると有意に少なかった。検定結果では、食形態領域 ($p=0.0021$)、食べ方領域 ($p=0.0130$)、偏食領域 ($p=0.0334$)、マナー領域 ($p=0.0446$) であり、有意に少なかった。これとは逆に食形態領域は、姿勢領域と食具領域に比べて有意に順調であるとの回答が多かった。マナー領域は、対応に苦慮している割合が他の領域よりも有意に多かった。検定を行った結果、マナー領域は、食形態 ($p=0.0000$)、姿勢 ($p=0.0000$)、食具 ($p=0.0000$)、食べ方 ($p=0.0003$)、偏食 ($p=0.0000$) の各領域に比べて有意に多かった。姿勢領域は、食べ方、偏食、マナーの各領域との差はなかった。

食具の使用・姿勢・マナーといった領域に課題を感じていることが分かった。

評価領域内比較：各領域の回答結果は、次の通りであった。

(a) 食形態領域：食材によって調理・加工が必要だが概ね食べられるが30.3% (40人)、子どもが食べられるように配慮している19.7% (26人)であった。食べ物をミキサー等と同じ形態に加工6.1% (8人)や養育者指定の食形態に加工3.8% (5人)であった。結果的に60%以上の児に対していずれかの方法で食形態の変更を行っていた。

(b) 姿勢：たまに姿勢の崩れが気にかかり声を掛ける36.4% (48人)が最も多く、次いで、食事時間の後半に声を掛ける18.2% (24人)、いつも崩れており常に声を掛ける6.1% (8人)であった。直接保育者が姿勢の崩れを直す必要がある11.4% (15人)であった。姿勢の崩れに対して直接姿勢を直すよりは声掛けで姿勢を直すように促していた。

(c) 食具：持ち方に対して、やりたい気持ちが強いので見守りや声掛けで対応する44.7% (59人)であった。一方で、養育者指定の食具使用14.4% (19人)、加工した食具を使用する12.1% (16人)であった。この結果から個人所有の食具を使用する児が約10%いることも判った。

(d) 食べ方：「こぼさないで」「よく噛んで」等の声掛け41.7% (55人)であった。一口量を取り分ける9.8% (13人)、養育者指定した方法で介助する6.1% (8人)であり、食べ方に応じた直接的な配慮を必要とする児が約10%いることが判った。誤嚥の心配がある3.0% (4人)で、わずかであった。

(e) 偏食：療育課題として成果が上がっている15.2% (20人)であった一方で、給食では対応できないため食べ物を持参する10.6% (14人)であった。偏食の要因は、感覚による偏食32.6% (43人)、園では食べるが家では食べない等の環境による偏食8.3% (11人)であった。

(f) マナー領域：食べることに集中しない27.3% (36人)が最も多く、次いで、マナーについて気になる21.2% (28人)であった。不快な印象を与える食べ方9.8% (13人)、食事の挨拶等のルールが守れない9.1% (12人)、不快な印象を与える食具の使い方2.3% (3人)であった。

領域内比較した結果、保育者は、声掛けや見守りで対応する割合が高かった。直接的な介助は、食形態では60%、その他の領域では全体の約10%の児に行っていた。

環境要因比較：

(a) 機能訓練実施施設と非実施施設の比較（付録11）：実施施設に在籍する児は49.2%（65人）、非実施施設に在籍している児は50.8%（67人）であった。非実施施設で食具領域（ $p=0.0057$ ）、食べ方領域（ $p=0.0039$ ）、マナー領域（ $p=0.0030$ ）で順調が有意に多かったが、偏食領域では、順調が有意に少なかった（ $p=0.0028$ ）。偏食の要因として非実施施設では、感覚による問題と考えていた（ $p=0.0063$ ）。マナー領域では、非実施施設で相手に不快な印象を与える食べ方（選択肢4）に対する回答が有意に少なかった（ $p=0.0009$ ）。実施施設と非実施施設の比較から非実施施設では、食感覚固有の問題だとする回答が実施施設よりも多く、食感覚に限らない障害特性としての感覚情報処理上の問題と捉えていない可能性があった。

(b) 給食提供状況の違いによる比較（付録12）：業者委託は72%（95人）、非業者委託は、自園調理給食21.2%（28人）、弁当持参6.8%（9人）計28%（37人）であった。

業者委託給食施設で順調との回答が有意に多い領域は、食形態（ $p=0.0428$ ）であった。非業者委託施設で食具領域においてやりたい気持ちが強いので見守っているが有意に多かった（ $p=0.0267$ ）。食べ方領域では、非業者委託施設で「こぼさないで」等の声掛けによる対応が有意に多かった（ $p=0.0232$ ）。結果として、非業者委託施設に比べて業者委託施設では、食形態が適切であり、声掛けによる対応が少なかった。

【保育者による食べる機能の発達評価研究の成果】

(a) 児童発達支援事業所に在籍する児の70%に何らかの食べる機能の発達支援を必要としていた。

(b) 食べる機能の発達支援を行う上での保育者の負担感は、マナー・食べ方・偏食の3領域、姿勢・食具の2領域で異なる。

(c) 食べ方やマナーの獲得は、3歳児以降の保育課題である（厚生労働省、2005）。この領域は保育者の専門領域であり、保育者本来の知識を反映した評価であった。

(d) 姿勢・食具の評価には、機能訓練実施施設と非実施施設で異なったことから、保育者のこれらの領域に対する知識量が反映した評価であった。

(e) 保育者は、食べ方、姿勢や食具の使用において、声掛けで対応していた。

(f) 非委託業者給食の方が保育者の介入が多いという結果から、昨今の給食業者の調理技術の向上が幼児にとって食べやすさを提供している可能性が示唆された。

(g) 医療者は、自らの専門性と保育者の問題意識の関連性を発信していく必要性があった。

V. 総合考察

食べる機能の発達に対する判断は大人に委ねられている。このことを強く意識する必要がある。保育・教育現場では、摂食嚥下機能に特別な配慮を必要とする児が在籍していないのではなく、食べる機能の発達上の課題を摂食嚥下機能に限定した捉え方をしている可

能性があった。

実態調査結果から熟練した保育者・教職員の摂食嚥下機能の発達に関する知識が十分であるとの回答は少なく、ほぼ理解している割合は28%であった。一方で、89%が保護者の質問を受けていた。さらに、外部専門家として保育・教育現場に助言する機会や直接指導する割合は低く（5～10%）、食べる機能の発達に関する知識を得る機会も少ない。このポイント差に医療者は、注目する必要がある。

保育・教育現場では、摂食嚥下機能と姿勢・食具・マナー・偏食が関連付けられていない可能性があった。また、保育者・教職員の知識や経験の量によって、各領域で問題とする範囲か、未熟さの範囲かの判断に差があった。換言すると、主体的に支援する場やその役目を担う職域があるという意識を持っていた。例えば、教育環境の備品を共通のものを利用することや食形態の選択肢がない中で、個別対応することの意義についての理解である。コップ等に代表される持ち込みやすく個性の高い物は個別対応率が高く、一方椅子・机は低い。特別支援学校では姿勢や食べ方、マナーに関する教育を実施する場は家庭であると捉え（中嶋、2019）、一方児童発達支援事業所では保育者が自分の専門領域の教育課題として捉えていた（中嶋、2020）。協力研究者の報告（藤田・中嶋、未発表）では、特別支援学校教職員の知識・経験が姿勢の問題に対する評価に関係した。

保育・教育現場では、摂食嚥下機能、姿勢、食具の使用、強い食嗜好性（偏食）に対する関心が高い。これらは一般家庭から挙がる食に関する悩み事と共通する。したがって障害の有無に関わらない幼児期・学童期の課題として考える必要がある。子どもと関わる職域間の連携の必要性が指摘されて久しいが、以前大きな課題であった。

医療者は積極的に保育・教育現場に赴き、食べる機能の発達に関する知識を伝えていく必要がある。一方で特別支援教育の養成課程においても食べる機能の発達に対する教育をカリキュラムに取り入れる必要があると思われた。

VI. 調査資料の公表

平成28年度科学研究費助成事業（基盤研究(C)）（一般）課題番号16K04850「障がいをもつ乳幼児の食べ方と発達を理解した指導・評価プログラム開発」で実施した調査は、以下に公表した。

口頭発表

1. 中嶋理香, 朝日利江, 藤田ひとみ. 愛知県の特別支援学校小学部における摂食嚥下に対する取り組みについての調査. 2017. 第23回 日本摂食嚥下リハビリテーション学会（千葉・幕張メッセ）.
2. 中嶋理香, 朝日利江, 藤田ひとみ. 愛知県下の保育園を対象とした食に関するアンケート調査結果. 2018. 平成29年度愛知県小児保健協会学術研修会（大府市・あいち小児センター）

調査研究論文

1. 中嶋理香. 特別支援学校小学部の食指導環境に関する調査. 小児保健研究 78(4). 2019 : 343-358.
2. 中嶋理香. 児童発達支援施設の保育士を対象とした「児の食べる機能」に関する質問紙調査. コミュニケーション障害 37(2). 2020 : 105-114.

The purpose of this study was to investigate the actual condition of food support that infants and children with disabilities receive in the field of childcare education, and to develop a program to collaborate between the field of childcare education and medical experts. From the fact-finding survey, the problems related to the development of eating function were narrowed down to three points: mastication, unbalanced eating, and posture, and it was necessary to address them as universal problems regardless of the presence or absence of disabilities. Creating a food support prototype for multi-disciplinary cooperation was difficult because the social infrastructure of each local government was different. Therefore, it is necessary for external specialists in the medical profession to pay attention to the information sent from the childcare education side when providing support at the childcare education side.

付録1 調査項目

表1 調査項目

| 領域 | 項目 | 問 |
|--------|--------------------|--|
| 基礎情報 | 回答者の基礎情報 | 回答者の職務内容 回答者の食指導経験年数 回答者の知識量 |
| | 学校の基礎情報 | 生徒の障害種 食支援に必要な生徒の割合 |
| 食指導の実情 | 食指導方針 | 生徒との会話 食べる速度 食べる量 |
| | 食指導環境 | 給食の有無 教職員のかかわり 介助担当期間 介助する生徒の人数 個別指導 外部専門家 ¹⁾ から助言を受ける機会 物品 ²⁾ の選定法 弁当や物品の持ち込み 再調理 |
| | 教育環境 | 学習講習会の開催実績 学習講習会の開催予定 個人研修への公費負担 |
| 回答者の実情 | | 教職員間で摂食嚥下機能の話題 保護者からの相談 食指導での困り感 誤嚥の心配 |
| | 自由記述 ³⁾ | 共通して気にかかること 興味関心 |

1) 小児科医、栄養士、歯科医、歯科衛生士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士

2) 食具・椅子/机・姿勢保持用のクッション・増粘剤・ミキサー

3) 各項目3つまで

付録2 基礎情報（回答者）

(a) 職種

| 職種 | 回答数 | 割合(%) |
|---------|-----|-------|
| a 保育士 | 311 | 74 |
| b 教諭 | 49 | 12 |
| d 栄養士 | 10 | 2 |
| e 歯科衛生士 | 1 | |
| c 看護師 | 1 | |
| f その他 | 49 | 12 |
| 未記入 | 1 | |
| 計 | 422 | 100 |

(b) 業務内容

| 業務内容 | 回答数 | 割合(%) |
|--------------|-----|-------|
| a 管理職(主事を含む) | 243 | 57 |
| b 主任 | 108 | 26 |
| c 担任 | 41 | 10 |
| d 栄養/食育担当 | 13 | 3 |
| e 保健/健康管理担当 | 1 | |
| f その他 | 16 | 4 |
| 計 | 422 | 100 |

(c) 現在の業務の経験年数

| 経験年数 | 回答数 | 割合(%) |
|-------------|-----|-------|
| a 5年未満 | 44 | 10 |
| b 5年から10年未満 | 36 | 9 |
| c 10年以上 | 337 | 80 |
| d その他 | 5 | 1 |
| 計 | 422 | 100 |

(d) 摂食嚥下指導の経験年数

| 摂食嚥下指導の経験 | 回答数 | 割合(%) |
|-------------|-----|-------|
| a 未経験 | 282 | 67 |
| b 5年未満 | 47 | 11 |
| c 5年から10年未満 | 17 | 4 |
| d 10年以上 | 72 | 17 |
| e その他 | 4 | 1 |
| 計 | 422 | 100 |

(e) 摂食嚥下機能の知識

| 摂食嚥下機能の知識 | 度数 | 割合(%) |
|--------------|-----|-------|
| a 十分理解している | 3 | |
| b ほぼ理解している | 117 | 28 |
| c あまり理解していない | 240 | 57 |
| d 全く理解していない | 42 | 10 |
| e その他 | 20 | 5 |
| 計 | 422 | 100 |

付録3 基礎情報（施設）

(a) 勤務施設

| 勤務施設 | 回答数 | 割合(%) |
|-------------------------|-----|-------|
| a 保育園子ども園 | 313 | 81 |
| b 児童発達支援センター／障害児支援通所施設等 | 51 | 13 |
| c 特別支援学校 小学部 | 18 | 5 |
| d その他 | 4 | 1 |
| 計 | 386 | 100 |

(b) 給食の提供

| 給食の提供 | 回答数 | 割合(%) |
|-------|-----|-------|
| a あり | 355 | 92 |
| b ない | 26 | 7 |
| c その他 | 5 | 1 |
| 計 | 386 | 100 |

(c) 利用者に対して障害を持つ児童生徒／幼児が占める割合

| 利用する障害のある児童生徒／幼児の人数 | 回答数 | 割合(%) |
|---------------------|-----|-------|
| a いない | 83 | 22 |
| b 1～5人未満 | 142 | 37 |
| c 5人以上～10人未満 | 66 | 17 |
| d 10人以上～20人 | 36 | 9 |
| e ほぼ全員 | 47 | 12 |
| f その他 | 12 | 3 |
| 計 | 386 | 100 |

(d) 摂食嚥下機能に特別な配慮を要する児童生徒／幼児の割合

| 摂食嚥下機能に特別な配慮をしている児童生徒／幼児の割合 | 回答数 | 割合(%) |
|-----------------------------|-----|-------|
| a 0% | 302 | 73 |
| b 25%くらい | 58 | 15 |
| c 50%くらい | 5 | 1 |
| d 75%くらい | 7 | 2 |
| e ほぼ全員 | 3 | 1 |
| f その他 | 11 | 3 |
| 計 | 386 | 100 |

付録4 食指導の実情（給食時間の過ごし方）

(a) 職員の関わり

| 職員の関わり | 度数 | 割合(%) |
|------------------|-----|-------|
| d 介助しながら一緒に食べる | 244 | 63 |
| a この質問に該当しない | 34 | 9 |
| b 介助しているが一緒に食べない | 27 | 7 |
| f その他 | 21 | 5 |
| c 一緒に食べているが介助しない | 18 | 5 |
| e 食べる様子を見ている | 12 | 3 |
| 複数回答 | 30 | 8 |
| 計 | 386 | 100 |

(b) 介助担当の決め方

| 食事介助担当の決め方 | 度数 | 割合(%) |
|---------------------|-----|-------|
| b 一年間同じ子どもを担当 | 170 | 44 |
| a この質問に該当しない | 81 | 21 |
| f 特に決めていない | 42 | 11 |
| e その日の職員で話し合って決める | 41 | 11 |
| g その他 | 31 | 8 |
| c ひと月から半年くらいの間隔で決める | 8 | 2 |
| d 曜日によって決める | 5 | 1 |
| 複数回答 | 8 | 2 |
| 計 | 386 | 100 |

(c) 職員一人当たりの介助する子どもの人数

| 担当する児の人数 | 回答数 | 割合(%) |
|-----------------|-----|-------|
| a この質問に該当しない | 118 | 31 |
| e 障害の状態に応じて決める | 86 | 22 |
| d 3児以上：1人 | 50 | 13 |
| h その他 | 36 | 9 |
| b 1児：1人 | 30 | 8 |
| f 児に応じて、その日に決める | 22 | 6 |
| g 特になし | 19 | 5 |
| c 2児：1人 | 12 | 3 |
| 複数選択 | 13 | 3 |
| 計 | 386 | 100 |

付録5 食事指導の実情（食事場面での教育的配慮）

(a) コミュニケーション

| 回答 | 回答数 | 割合(%) |
|-----------------------|---------|-------|
| a この質問に該当しない | 10 | |
| b 積極的に話す | 32 | 8 |
| c 会話が弾むように質問・共感する | 183 | 43 |
| d 子ども間の会話に入らないようにしている | 1 | |
| e 食べることに集中させる | 31 | 7 |
| f 静かに食べるように | 9 | 2 |
| g 特に決めてない | 37 | 9 |
| h あまり気にしていない | 3 | 1 |
| i その他 | 69 | 16 |
| 複数回答 | 21 | 5 |
| 無回答 | 26 | 6 |
| 複数回答内訳 | | |
| | b, c | 8 |
| | c, d, e | 1 |
| | c, e | 6 |
| | c, f | 1 |
| | c, i | 2 |
| | e, i | 2 |
| | f, i | 1 |

(b) 食べる速さ

| 回答 | 回答数 | 割合(%) |
|----------------|---------|-------|
| a この質問に該当しない | 7 | 2 |
| b ゆっくり食べるように | 0 | |
| c 早く食べるように | 1 | |
| d その日の予定に合わせて | 29 | 7 |
| e 子どものペースに任せる | 199 | 47 |
| f 特に決めてない | 10 | 3 |
| g あまり気にしたことがない | 52 | 12 |
| h その他 | 81 | 19 |
| 複数回答 | 17 | 4 |
| 無回答 | 26 | 6 |
| 複数回答内訳 | | |
| | b, c | 1 |
| | b, c, e | 1 |
| | b, e | 5 |
| | b, h | 3 |
| | d, e | 1 |
| | e, h | 6 |

(c) 食べる量

| 回答 | 回答数 | 割合(%) |
|--------------|------------|-------|
| a この質問に該当しない | 6 | 1 |
| b たくさん | 1 | |
| c 残さず | 48 | 11 |
| d 食べられるだけ食べる | 59 | 14 |
| e あらかじめ調節 | 113 | 27 |
| f 希望に応じて調節 | 71 | 17 |
| g 特に決めてない | 2 | 1 |
| i その他 | 41 | 10 |
| 複数回答 | 55 | 13 |
| 無回答 | 26 | 6 |
| 複数回答内訳 | | |
| | b, c, d, i | 1 |
| | b, e | 1 |
| | c, d | 2 |
| | c, d, e, f | 2 |
| | c, d, f | 2 |
| | c, e | 9 |
| | c, e, f | 5 |
| | c, f | 6 |
| | d, e | 2 |
| | d, e, f | 3 |
| | d, f | 2 |
| | d, i | 1 |
| | e, f | 16 |
| | e, f, i | 1 |
| | e, i | 2 |

付録6 食事指導の実情（食事指導場面の環境設定）

(a) 手元加工

| 手元加工 | 回答数 | 割合(%) |
|-----------|-----|-------|
| a 該当児がいない | 128 | 33 |
| a, b | 6 | |
| a, c | 1 | |
| b はい | 225 | 58 |
| b, d | 1 | |
| c いいえ | 10 | 3 |
| c, d | 1 | |
| d その他 | 14 | 4 |
| 計 | 386 | |

(b) 増粘剤等の添加

| 増粘剤の添加 | 回答数 | 割合(%) |
|-----------|-----|-------|
| a 該当児がいない | 253 | 65 |
| a, b | 1 | |
| a, c | 7 | |
| b はい | 23 | 6 |
| c いいえ | 88 | 23 |
| d その他 | 14 | 4 |
| 計 | 386 | |

(c) 食品の持ち込み

| 食品の持ち込み | 回答数 | 割合(%) |
|-----------|-----|-------|
| a 該当児がいない | 137 | 36 |
| a, b | 6 | |
| a, c | 1 | |
| a, c | 3 | |
| b はい | 201 | 52 |
| c いいえ | 13 | 3 |
| c, d | 1 | |
| d その他 | 24 | 6 |
| 計 | 386 | |

(d) 食形態・食具・椅子・机・コップなどの選定

| 回答 | 食形態 | 割合 | 食具 | 割合 | 椅子・机 | 割合 | コップ等 | 割合 |
|-------------------|-----|-----|-----|-----|------|-----|------|-----|
| 単一回答の割合（386回答）（%） | 295 | 76% | 268 | 69% | 286 | 74% | 234 | 61% |
| 複数回答の割合 | 91 | 24% | 60 | 31% | 100 | 26% | 152 | 39% |
| 共通 | 146 | 38% | 193 | 50% | 240 | 62% | 121 | 31% |
| 職員間で相談 | 68 | 18% | 27 | 7% | 31 | 8% | 15 | 4% |
| 担当者個人の判断 | 3 | | 5 | 1% | | | | |
| 家族に選んでもらう | 12 | 3% | 5 | 1% | | | 23 | 6% |
| 外部専門家の意見 | 6 | | 4 | | 1 | | | |
| 個人の持ち物 | 15 | 4% | 15 | 4% | | | 62 | 16% |
| その他 | 45 | 12% | 19 | 5% | 14 | 4% | 13 | 3% |
| 回答数 | 295 | | 268 | | 286 | | 234 | |

(e) 外部専門家の利用・指導

| 外部専門家の利用 | 職域 | はい | | いいえ | | その他 | |
|----------|-----------|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| | | 回答数 | 割合 | 回答数 | 割合 | 回答数 | 割合 |
| 個別指導 | 外部専門家 | 20 | 5% | 354 | 92% | 12 | 3% |
| | 職員 | 22 | 6% | 350 | 91% | 14 | 3% |
| 外部専門家の助言 | 小児科医／栄養士 | 56 | 15% | 323 | 84% | 7 | 2% |
| | 歯科医／歯科衛生士 | 38 | 10% | 338 | 88% | 10 | 2% |
| | PT／OT／ST | 51 | 13% | 326 | 84% | 9 | 2% |

付録7 職員の教育環境

(a) 過去2年間で食に関する研修実績

| 過去2年間の研修実績 | 回答数 | 割合(%) |
|------------|-----|-------|
| a はい | 54 | 14 |
| b いいえ | 321 | 83 |
| b, c | 1 | |
| c その他 | 10 | 3 |
| 計 | 386 | 100 |

(b) 今後予定されている研修

| 今後の研修予定 | 回答数 | 割合(%) |
|---------|-----|-------|
| a はい | 29 | 8 |
| b いいえ | 332 | 86 |
| b, c | 1 | |
| c その他 | 24 | 6 |
| 計 | 386 | 100 |

(c) 公費での研修参加

| 公費での研修参加 | 回答数 | 割合(%) |
|----------|-----|-------|
| a はい | 240 | 62 |
| b いいえ | 5 | 1 |
| b, c | 96 | 25 |
| c その他 | 45 | 12 |
| 計 | 386 | 100 |

(d) 情報収集

| 情報収集 | 回答数 | 割合(%) |
|-------------------|-----|-------|
| 自分で積極的に知識を得ている | 383 | 91 |
| 自分で知識を得るが、うまく探せない | 20 | 5 |
| 特に必要がない | 19 | 4 |
| 計 | 422 | 100 |

付録8 回答者の実情

| 設問 | はい | いいえ | その他 |
|-----------------------|-----|-----|-----|
| 保護者から相談を受けたことがありますか | 376 | 45 | 1 |
| 割合 | 89% | 11% | |
| 困っていることはありますか | 189 | 224 | 9 |
| 割合 | 45% | 53% | 2% |
| 誤嚥を心配したことがありますか | 275 | 143 | 4 |
| 割合 | 65% | 34% | 1% |
| 教職員間で子どもの食がよく話題になりますか | 199 | 192 | 31 |
| 割合 | 47% | 45% | 7% |

(e) 子どもの食べる様子で気にかかること

| カテゴリ | 全体 | 割合(%) |
|-----------------|-----|-------|
| 口腔機能全般・食べ方・咀嚼姿勢 | 297 | 35 |
| 強い食嗜好性 | 136 | 16 |
| マナー | 86 | 10 |
| 食具 | 90 | 11 |
| その他 | 29 | 4 |
| 食事量 | 17 | 2 |
| 食への関心 | 16 | 2 |
| 食経験 | 12 | 1 |
| 食時間への意識 | 9 | 1 |
| アレルギー | 7 | 1 |
| 食形態 | 12 | 1 |
| 誤嚥 | 7 | 1 |
| 合計 | 840 | |

付録9 施設の概要

施設の概要

| 施設 | 在籍見数 | 0歳～3歳 | 3歳～6歳 | 一般園との併用 | 職員雇用形態 | 職種 | 機能訓練担当者による直接食事指導 | 機能訓練担当職種 | 保育所等の訪問支援 | 調理主体 |
|----|------|-------|-------|---------|--------|----------|------------------|----------|-----------------|------------|
| A | 未記入 | | | 実施している | 非常勤 | PT、OT、ST | あり | OT | 実施している／訪問を受けている | 業者委託給食 |
| B | 20 | 10 | 10 | 実施している | 非常勤 | OT、ST | なし | なし | 実施している | 自園調理昼食 |
| C | 30 | 2 | 28 | 実施していない | なし | なし | なし | なし | 実施している | 保護者が用意する弁当 |
| D | 58 | 15 | 43 | 実施していない | 常勤 | ST | なし | なし | 実施している | 業者委託給食 |
| E | 30 | 8 | 22 | 実施していない | 非常勤 | ST | あり | OT、ST | 訪問を受けている | 自園調理昼食 |
| F | 19 | 4 | 15 | 実施している | 非常勤 | PT | あり | PT | 訪問を受けていない | 業者委託給食 |
| G | 80 | 27 | 53 | 実施している | 非常勤 | PT、OT、ST | なし | なし | 訪問を受けていない | 保護者が用意する弁当 |
| H | 30 | 15 | 15 | 実施していない | 常勤+非常勤 | PT、OT、ST | あり | PT、OT、ST | 実施している | 業者委託給食 |
| I | 17 | 1 | 16 | 実施している | 非常勤 | OT、ST | あり | OT | 実施している | 自園調理昼食 |
| J | 15 | 3 | 12 | 実施している | なし | なし | なし | なし | 実施している | 業者委託給食 |

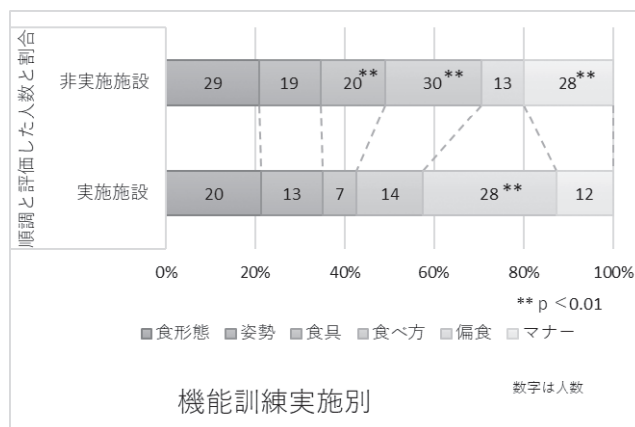
付録10 調査に用いた評価票および回答

調査項目と回答結果

| 領域 | 質問 | 全体 | | 機能訓練 | | | | 昼食形態 | | | |
|--|--|------|------|------|------|------------------|-------|------------------|------|------------------|------|
| | | 人 | % | 実施 | 非実施 | 業者委託給食 | 非業者委託 | 人 | % | 人 | % |
| (1) 食形態 | 能力や年齢にあっており、順調に発達していると思う | 49 | 37.1 | 20 | 30.8 | 29 | 43.3 | 40 ³⁾ | 42.1 | 9 | 24.3 |
| | 食材によっては、調理・加工するなどの配慮が必要だが、おおむね食べられると思う | 40 | 30.3 | 17 | 26.2 | 23 | 34.3 | 29 | 30.5 | 11 | 29.7 |
| | 子どもが食べられるように、食材を選び、献立や調理法を配慮して、対応している | 26 | 19.7 | 14 | 21.5 | 12 | 17.9 | 17 | 17.9 | 9 | 24.3 |
| | ミキサーや包丁を使用して、同じ形態に替えることで対応している | 8 | 6.1 | 7 | 10.8 | 1 | 1.5 | 4 | 4.2 | 4 | 10.8 |
| | 養育者から指定された方法で、加工して、対応している | 5 | 3.8 | 4 | 6.2 | 1 | 1.5 | 3 | 3.2 | 2 | 5.4 |
| (2) 食べる姿勢 | 食形態に関して、対応しきれていない。何らかの指導が必要だと思う | 4 | 3.0 | 3 | 4.6 | 1 | 1.5 | 2 | 2.1 | 2 | 5.4 |
| | 姿勢の崩れはなく、食事中、姿勢に関して子どもに声をかけることはないので、順調だと思う | 32 | 24.2 | 13 | 20.0 | 19 | 28.4 | 24 | 25.3 | 8 | 21.6 |
| | 食べ始めは、よい姿勢で食べているが、後半は、姿勢を直すように子どもに声をかけている | 24 | 18.2 | 10 | 15.4 | 14 | 20.9 | 19 | 20.0 | 5 | 13.5 |
| | たまに姿勢が崩れているが、その都度姿勢を直すように子どもに声をかけている | 48 | 36.4 | 27 | 41.5 | 21 | 31.3 | 32 | 33.7 | 16 | 43.2 |
| | いつも姿勢が崩れており、常に子どもに声掛けが必要である | 8 | 6.1 | 2 | 3.1 | 6 | 9.0 | 5 | 5.3 | 3 | 8.1 |
| (3) 食具の使用・持ち方 | お尻がずれたり、左右に寄りかかるなど、姿勢を大人が直す必要がある食べる姿勢について対応しきれていない。何らかの指導が必要だと思う | 15 | 11.4 | 10 | 15.4 | 5 | 7.5 | 11 | 11.6 | 4 | 10.8 |
| | 能力や年齢にあっており、順調に発達していると思う | 5 | 3.8 | 3 | 4.6 | 2 | 3.0 | 4 | 4.2 | 1 | 2.7 |
| | 食具に何らかの加工を施して、使用している | 27 | 20.5 | 7 | 10.8 | 20 ¹⁾ | 29.9 | 23 | 24.2 | 4 | 10.8 |
| | 自分でやりたい気持ちが強いので、食べる様子を見守ったり、声かけで対応している | 16 | 12.1 | 7 | 10.8 | 9 | 13.4 | 12 | 12.6 | 4 | 10.8 |
| | 養育者に指定された食具を使用している | 59 | 44.7 | 31 | 47.7 | 28 | 41.8 | 37 | 38.9 | 22 ⁴⁾ | 59.5 |
| (4) 食べ方や食べる様子 | 養育者に指定された食具を使用している | 19 | 14.4 | 12 | 18.5 | 7 | 10.4 | 15 | 15.8 | 4 | 10.8 |
| | 手づかみで食べているので、食具は使っていない | 5 | 3.8 | 3 | 4.6 | 2 | 3.0 | 4 | 4.2 | 1 | 2.7 |
| | 食具の使用について、対応しきれていない。何らかの指導が必要だと思う | 6 | 4.5 | 5 | 7.7 | 1 | 1.5 | 4 | 4.2 | 2 | 5.4 |
| | 能力や年齢にあっており、順調に発達していると思う | 44 | 33.3 | 14 | 21.5 | 30 ¹⁾ | 44.8 | 35 | 36.8 | 9 | 24.3 |
| | 「こぼさないで」「よくかんで」「詰め込まないで」「ゆっくりね」など、声かけして対応している | 55 | 41.7 | 31 | 47.7 | 24 | 35.8 | 34 | 35.8 | 21 ⁴⁾ | 56.8 |
| (5) 偏食 | 詰め込むなど食べ方に問題があり、一口量を取り分けるなど、事前に対応している | 13 | 9.8 | 7 | 10.8 | 6 | 9.0 | 11 | 11.6 | 2 | 5.4 |
| | 養育者に指定された方法で食べている | 8 | 6.1 | 6 | 9.2 | 2 | 3.0 | 6 | 6.3 | 1 | 2.7 |
| | いつも丸のみ・ムセが気にかかり、誤嚥が心配である | 4 | 3.0 | 3 | 4.6 | 1 | 1.5 | 3 | 3.2 | 2 | 5.4 |
| | 食べ方について、対応しきれていない。何らかの指導が必要だと思う | 8 | 6.1 | 4 | 6.2 | 4 | 6.0 | 6 | 6.3 | 2 | 5.4 |
| | 平均的な「好き嫌い」のため、苦慮していない | 41 | 31.1 | 28 | 43.1 | 13 ²⁾ | 19.4 | 33 | 34.7 | 8 | 21.6 |
| (6) 食べる時のマナー | 偏食はあるが保育課題として取り組み、成果が上がっていると実感している | 20 | 15.2 | 10 | 15.4 | 10 | 14.9 | 11 | 11.6 | 9 | 24.3 |
| | 給食は食べるが、家庭では食べない／特定の保育士と食べるなどの環境による偏食だと思う | 11 | 8.3 | 6 | 9.2 | 5 | 7.5 | 5 | 5.3 | 6 | 16.2 |
| | 偏食はひどいが、食べられる物と食べられない物を予測でき、感覚による偏食だと思う | 43 | 32.6 | 14 | 21.5 | 29 | 43.3 | 36 | 37.9 | 7 | 18.9 |
| | 偏食がひどく、給食等では対応できず、子どもの好きなものを持参するなど、特別な配慮が必要である | 14 | 10.6 | 7 | 10.8 | 7 | 10.4 | 9 | 9.5 | 5 | 13.5 |
| | 偏食について、対応しきれていない。何らかの指導が必要だと思う | 3 | 2.3 | 0 | 0.0 | 3 | 4.5 | 1 | 1.1 | 2 | 5.4 |
| (6) 食べる時のマナー | 能力や年齢にあっており、順調に発達していると思う | 40 | 30.3 | 12 | 18.5 | 28 ¹⁾ | 41.8 | 33 | 34.7 | 7 | 18.9 |
| | 離席・食べ物で遊ぶ・話に夢中になるなど、食べることに集中しない | 36 | 27.3 | 22 | 33.8 | 14 | 20.9 | 27 | 28.4 | 9 | 24.3 |
| | 相手に不快な印象を与える食具の使い方(ねぶり箸、スプーンをカチャカチャ言わせる)をする | 3 | 2.3 | 1 | 1.5 | 2 | 3.0 | 2 | 2.1 | 1 | 2.7 |
| | 相手に不快な印象を与える食べ方(食物を口に入れたまま話をする・くちやくちやと音を立てる)をする | 13 | 9.8 | 12 | 18.5 | 1 | 1.5 | 9 | 9.5 | 4 | 10.8 |
| | いただきます／ごちそうさま／お代わりなど、食事に関するルールが守れない | 12 | 9.1 | 8 | 12.3 | 4 | 6.0 | 7 | 7.4 | 5 | 13.5 |
| 上記には当てはまらないが、食べる時のマナーについて気になることがあり、指導が必要だと思う | 28 | 21.2 | 10 | 15.4 | 18 | 26.9 | 17 | 17.9 | 11 | 29.7 | |

1) 実施施設に比べて有意に順調と判断した子どもの人数が多い領域
 2) 実施施設に比べて有意に順調と判断した子どもの人数が少ない領域
 3) 非業者委託施設に比べて有意に順調と判断した子どもの人数が多い領域
 4) 業者委託施設に比べて有意に多い

付録11 機能訓練実施施設と非実施施設の比較



付録12 給食提供状況の違いによる比較

